

中期計画
(2022～2027)

初等部
責任者名:初等部長

【フェーズⅢ・3年間の運営方針】 (2025～2027年度)	【フェーズⅢ・3年後のありたい状態】(2027年度)
<p>1. 人材育成、教育の方針</p> <p>≪教育方針≫</p> <p>◎キリスト教主義に基づく全人教育と“Mastery for Service”を体現する世界市民の育成</p> <p>初等部聖句 「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」ルカによる福音書2章40節</p> <p>≪4つの柱≫</p> <p>◎Bible(聖書・礼拝) 礼拝や聖書の時間を通じて、人を思いやる気持ち、小さなことに感謝できる心を育む。</p> <p>◎Global(国際理解) 英語力を高め、コミュニケーションを楽しみながら、異なる価値観の獲得をめざす。</p> <p>◎Universal(全員参加・理解) みんなで主体的に問題解決を図りながら、確かな学力の獲得をめざす。</p> <p>◎Authentic(本物) 文化、スポーツ、芸術、自然に触れる機会を通じて、豊かな感性を育む。</p>	<p><2027年度のありたい状態></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. キリスト教主義に基づく全人教育と“Mastery for Service”の具現化。すべての教員がキリスト教主義教育の担い手として、常に建学の精神とスクールモットー“Mastery for Service”を日々の教育活動の中で具体的に実践している。 2. Bible(聖書・礼拝) 日常生活の様々な場面で、他者に関心を持ち、やさしさと思いやりの心を注ぐことができる子どもが育っている。 3. Global(国際理解) 英語学習、国際理解教育を通して、国際的な視野を広げ、異なる文化や価値観を受け入れ、多様性を尊重する子どもが育っている。 4. Universal(全員参加・理解) 多様性を受け入れ、様々な個性をもった仲間たちと学び合う中にこそ深い学びがあることを理解し、すべての子どもが安心して授業に取り組むことができている。 5. Authentic(本物) 様々な本物に触れる経験を通して、自分自身の興味や関心を追求する姿勢をもった子どもが育っている。
<p>2. 児童・生徒獲得の方針</p> <p>◎魅力ある学校づくり(上記参照)</p> <p>◎広報活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入試イベントの充実 ・幼児教室、インター系幼稚園での説明会実施 ・関西学院の同窓家庭へのアプローチ ・Instagram等のSNSを用いた広報活動 <p>◎入試方法の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入試問題、B入試の内容等 	<p><2027年度のありたい状態></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. すべての教員がキリスト教主義教育の担い手として、4つの柱に掲げられた教育内容を主体的に実践している。 2. すべての教員が、志願者確保に高い関心を持ち、自分事として積極的に広報活動に協力している。 3. 少子化の時代にふさわしい入試方法を検討、実施している。
<p>6. 中期的な課題</p> <p><フェーズⅢ(2025～2027)></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 入試志願者の確保 2. 新しい学びのかたちへの転換 3. 英語・国際理解教育の充実 4. 多様化する子どもたちへの対応 5. 中学年の教科担任制導入 6. 学年担当制の導入 7. 教師力向上のための研究・研修の機会の確保 8. 教員の働き方改革と業務の見直し 9. 関西学院各学校との連携 10. 初・中・高・千里間での情報の共有 11. 教育設備の整備 	

	<p>(2)卒業生ネットワークの活用と発信強化</p> <p>4. 入試制度の高度化</p> <p>(1)発達特性に配慮した試験設計</p> <p>(2)面接・観察の評価項目の明確化と研修体制</p> <p>(3)発達検査要素の導入と専門部署の設置</p> <p>5. 効果の確認と改善</p> <p>(1)イベント後アンケートの徹底と分析(志望度変化・印象・改善要望)</p> <p>(2)デジタル広報の効果の分析(LINE 登録数、動画再生数、サイト訪問数など)</p> <p>(3)入試結果と6年時の育ちの追跡調査とフィードバック活用</p>
<p>期待される成果 (取り組みによりめざす姿)</p>	<p>(1)理念に共鳴する児童の安定的な獲得 「Mastery for Service」に共鳴し、没頭・協働性・思いやりを備えた児童が集い、学校文化の核となる人材が育成される。</p> <p>(2)受験者数の増加と質の向上の両立 地域拡大と広報強化により受験者数が増加し、選抜精度の向上により理念に適した児童の選抜が可能となる。 A入試(80名募集)に対して160名の受験生確保(2倍)、A・B入試一ータルで2.3倍を目指す。</p> <p>(3)学校ブランドの確立と認知度向上 デジタルとリアルを融合した広報活動により、学校の魅力が広く伝わり、保護者・教育関係者からの信頼と認知度が高まる。</p> <p>(4)持続可能な入試運営体制の構築 発達特性への配慮や評価体制の整備により、児童一人ひとりの個性を尊重した公平な入試が実現し、教育理念に沿った持続可能な運営が可能となる。</p> <p>(5)卒業後まで見据えた教育成果の可視化 入試から卒業までの育ちの追跡調査により、教育の成果が可視化され、学校の教育力の証明とさらなる改善に繋がる。</p>
<p>テーマ3:英語・国際理解教育の充実</p>	
<p>種別(該当するものを○): <input checked="" type="radio"/> 新規取り組み <input type="radio"/> 事業削減</p>	
<p>具体施策 (取り組み内容)</p>	<p>1. CCT(カナダ・コミュニケーション・ツアー)の再構築</p> <p>(1)時差の課題を克服するため、非同期型交流(ビデオレター、共同制作物、手紙交換など)を導入</p> <p>(2)カナダバンクーバーの教育委員会と連携し、交流先の安定化を図る</p> <p>(3)探究テーマ型CCT(例:環境・多文化共生)を導入し、教育的価値を高める</p> <p>(4)事前・事後学習を体系化し、学びの深まりと社会化(発表会など)を促進</p> <p>2. 海外の学校との交流のカリキュラム化</p> <p>(1)インドネシア、オーストラリア、台湾、韓国の小学校との交流の数を増やすと共に、総合的な学習としての位置づけに加え、部分的に英語授業内にも位置づけ、アウトプットの場として活用</p> <p>(2)相互交流をしている韓国、台湾には希望児童が参加できるような体制を整える</p> <p>3. 習熟度別英語授業の導入(高学年・週1時間)</p> <p>(1)中学年(3・4年生)高学年(5・6年生)を対象に習熟度別クラスを導入</p> <p>(2)英語力に応じた指導で「わかる・できる」実感を高める</p> <p>4. 英語が「好き」になる仕掛けづくり</p> <p>(1)English Dayなどのイベントを定期開催</p> <p>(2)英語絵本の読み聞かせ・貸出を通じて低学年から親しみを育む</p> <p>(3)ネイティブ教員との交流時間を授業外にも確保</p> <p>5. 大学との連携による国際交流・教育の強化</p> <p>(1)大学の留学生との交流回数を増やし、日常的なコミュニケーションの機会を子どもたちが持つことができるようにする</p>

	<p>(2)留学生による英語絵本の読み聞かせや母国紹介、英会話など</p> <p>(3)大学の教育学部・国際学部等と連携し、英語アクティビティやワークショップを共催</p>
<p>期待される成果 (取り組みによりめざす姿)</p>	<p>(1)英語の知識・技能を活用する「生きた場面」が増加する</p> <p>(2)英語学習に対する児童の興味・関心が向上する(「英語が好き」児童の割合 70%以上を目指す)</p> <p>(3)習熟度に応じた授業で「わかりやすい」英語授業の実現する</p> <p>(4)英検 3 級以上の合格率 60%以上</p> <p>(5)国際的な視野を持ち、異文化を尊重する児童の育成</p> <p>(6)大学との連携により、教育の質と広がりが向上する</p>
<p>テーマ4:多様化する子どもたちへの対応(新しい学びのかたちへの転換)</p>	
<p>種別(該当するものを○): <u>新規取り組み</u> ・ 事業削減</p>	
<p>具体施策 (取り組み内容)</p>	<p>1. 教科横断・地域連携型学習の推進</p> <p>(1)地域・SDGs をテーマにした総合学習の展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宝塚市役所との連携による街づくりプロジェクト、防災甲子園への参加 ・地域課題(環境、福祉、防災など)を題材にした探究活動 ・成果発表会の実施(保護者・地域住民との共有) <p>(2)教科横断的なカリキュラム設計</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会×理科×図工などの教科連携によるプロジェクト型学習 ・AI 教育の導入・活用 個別最適化された学習支援を通じて、「新しい学び」を推進 ・教員研修による指導力向上 <p>2. 子ども主体の特別活動の再構築</p> <p>(1)委員会活動の改革</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体育祭やクリスマス礼拝などの行事を子どもと協働で企画・運営 ・提案型児童会の導入により、学校運営への参画を促進 <p>(2)クラブ活動の自律的運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラブの運営を子どもに委ねる ・地域イベントへの参加など、成果の発信を支援 <p>3. 推薦基準の見直しと進路の適正化</p> <p>(1)推薦基準の分析と改訂</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過去の進学データを分析し、ミスマッチの傾向を把握 ・新基準の導入と保護者説明会の実施 <p>(2)進路選択の支援体制の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども一人ひとりの成長に応じた進路指導 ・初等部での学びの質向上による進学意欲の醸成 <p>4. 多様な子どもへの支援体制の整備</p> <p>(1)教室外の安心できる居場所の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援を必要とする児童が安心して過ごせる「安心ルーム」の設置と運用 ・不登校傾向児童のための中間地点の整備 <p>(2)個別支援計画の策定と運用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員間の情報共有による一貫した支援体制の構築 ・特別支援コーディネーターの採用による個別支援計画の策定と共有 ・特別支援教育に関する教員研修の実施 <p>(3)保護者との連携強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援方針の共有と協働体制の構築
<p>期待される成果 (取り組みによりめざす姿)</p>	<p>(1)学びの質の向上:子どもが社会とつながる学びを通じて、課題発見・解決力を育む</p> <p>(2)自主性と参画意識の育成:子どもが学校運営に参画し、達成感と貢献感を得る</p> <p>(3)進路の適正化:子どもに合った進路選択が可能となり、学びの可能性が広がる</p> <p>(4)安心できる学習環境の整備:教室に戻るための安心感が得られ、不登校傾向児童も学びに参加できる</p>

	(5)協働体制の確立:教員・保護者が共通理解のもとで子どもを支える体制が整う
テーマ5:新しい学びのかたちへの転換(教師力向上のための研究・研修のための機会の確保)	
種別(該当するものを○): <u>新規取り組み</u> ・事業削減	
<p>具体施策 (取り組み内容)</p>	<p>1. 教育目標の共有とビジョンの明確化 (1)「育てたい子ども像」を言語化するワークショップを実施 (2)「学びに向かう力」「人間性」「ウェルビーイング」を軸にした研修基調提案を作成 (3)教育目標を授業や児童対応に落とし込むための研修を実施</p> <p>2. 授業改善と実践的な学びの場の創出 (1)学校公開会で外部講師・他校教員から授業へのフィードバックを受ける (2)「個が活きる関わり合い」をテーマに授業改善の指針を策定 (3)探究的・協働的な学びを促進する授業デザイン研修を年2回実施</p> <p>3. 校内研究の深化と部会活動の充実 (1)「カリキュラムマネジメント」「特別支援教育」「効果的な学級経営」の3部会による研究活動を通年で実施 (2)各部会での公開授業と成果発表会を通じて、実践と理論の往還を図る (3)教師の自主的な研究活動を支援し、ピアレビューによる相互学習を促進</p> <p>4. 教師の児童理解力と関わり方の向上 (1)ケーススタディ研修で実際の児童対応事例をもとに指導の在り方を検討 (2)ウェルビーイングの観点から児童理解を深める研修を実施 (3)日常的な児童との関わり方を見直し、長期的な成長を見据えた対応力を育成</p> <p>5. 外部連携と視野の拡張 (1)他校・教育機関への視察研修を実施し、先進的な実践を学ぶ (2)外部講師を招聘し、教育哲学・授業改善・非認知能力育成などを学ぶ (3)教育学部をはじめ学院他学部との共同研究を希望者に対して支援し、実践の幅を広げる</p> <p>6. 成果の可視化と評価 (1)全国学力学習状況調査・外部テストにおける非認知能力の向上を目指す (2)学校評価アンケートにおける「学びに向かう姿勢」「ウェルビーイング」項目の満足度向上</p>
<p>期待される成果 (取り組みによりめざす姿)</p>	<p>(1)児童の学びに向かう姿勢の変容 ・難しい課題にも粘り強く取り組み、自分なりの納得解を導き出す児童が増加 ・一人で考える力と、友達と協働する力の両方を育む授業が定着 ・授業中に児童が自発的に問いを立て、探究する姿が日常的に見られるようになる</p> <p>(2)教師の授業観・児童観の転換 ・教師が「育てたい子ども像」を明確に持ち、授業設計や児童対応に反映できる ・一斉授業中心のスタイルから脱却し、個の尊重・対話・協働を重視した授業へと転換 ・規律重視の指導から、児童の長期的な成長と幸福を見据えた関わり方へと変化</p> <p>(3)教師の専門性と協働性の向上 ・教師が自ら課題を見つけ、研究・実践・振り返りを通じて専門性を高める ・部会活動や校内研修を通じて、教員同士が学び合い、支え合う文化が定着 ・外部との連携や視察を通じて、教育の視野を広げ、先進的な実践を取り入れる力が育つ</p> <p>(4)学校全体の教育力の向上 ・「学びに向かう力」「人間性」「ウェルビーイング」を育む教育が学校全体の共通理念として浸透 ・教師の成長が児童の成長に直結し、児童・教師・保護者がともに学び合う学校文化が形成される ・外部テストにおいて、非認知能力や学びへの姿勢に関する項目で全国平均を上回る成果が得られる</p>
テーマ6:教員の働き方改革と業務の見直し	
種別(該当するものを○): <u>新規取り組み</u> ・事業削減	

<p>具体施策 (取り組み内容)</p>	<p>1.業務分担と支援体制の強化 (1)管理職の業務分担を明確にし、迅速な対応と校務の効率化を図る。 (2)特別支援コーディネーターの採用 特別な支援が必要な児童への対応を専門的に担い、担任の負担を軽減。 (3)スクールソーシャルワーカーの配置 家庭・福祉・医療など関係機関と連携し、児童の課題に専門的に対応。 (4)関西学院大学生との交流の推進 教育実習や学習支援活動を通じて、児童の学習意欲や社会性を育むとともに、教員の授業・補習・個別対応の負担を軽減。</p> <p>2. ICT・AI の活用による業務効率化 (1)タイムカードと BLEND の連動 勤務実態を正確に把握し、業務改善の基礎データとして活用。 (2)AI 教育の導入・活用 個別最適化された学習支援を通じて、「新しい学び」を推進し、教員の業務を効率化。</p> <p>3. 教育環境と安全対策の整備 (1)グラウンドへのミスト設置による熱中症対策と快適な学習環境の整備。 (3)将来的な自家用車送迎体制の整備(入校感知板・警備員増員) 登下校の安全性を確保し、保護者の利便性を向上。</p> <p>4. 保護者支援と学校の魅力向上 (1)アフタースクールの開設 共働き家庭への支援を強化し、学校の魅力を高める。 (2)学校広報の強化 取り組みの成果を積極的に発信し、志願者の増加と地域からの信頼を得る。</p>
<p>期待される成果 (取り組みによりめざす姿)</p>	<p>(1)教員の働き方改革と業務負担の軽減 ・業務分担の明確化による効率的な校務運営 ・タイムカードと ICT 連動(Blend)による勤務実態の正確な把握 ・特別支援コーディネーターの配置による専門的支援と教員の負担軽減 ・教育学部生との交流による授業・補習・個別対応の一部支援による教員の負担軽減 ・AI 活用による教材作成・評価業務の効率化</p> <p>(2)児童支援体制の充実と教育の質向上 ・スクールソーシャルワーカー、特別支援コーディネーターの採用による多様な児童課題への対応 ・特別支援児童への個別支援の強化と学力保障 ・教育学部生との交流による学習支援・ふれあい活動を通じた学習意欲の向上と社会性の育成</p> <p>(3)環境の改善と安全対策の強化 ・ミスト設置による熱中症対策と快適な学習環境の提供 ・自家用車送迎体制の整備による登下校の安全確保</p> <p>(4)保護者支援と学校の魅力向上 ・アフタースクールの開設による共働き家庭への支援 ・保護者の利便性向上による満足度の向上 ・学校広報の強化によるブランド力の向上 ・志願者数の増加と地域から選ばれる学校づくり</p> <p>(5)持続可能な学校運営の実現 ・教職員の職場満足度の改善 ・教育の質と働き方改革の両立による安定的な運営体制</p> <p>(6)進捗管理と評価方法 ・年度ごとに教職員・保護者アンケートを実施 ・校内会議での定期報告と改善提案 ・成果を広報資料や説明会で共有</p>

【3年間の取り組み状況(中期計画)を測る指標】

- ① スクールモットーの認知度・共感度
- ② 志願者数
- ③-1 英語授業への関心
- ③-2 英語授業での理解度
- ③-3 英語の習得
- ④ 教育課程の改善
- ⑤-1 不登校児童の割合
- ⑤-2 友達や教師との信頼関係
- ⑥-1 算数授業への関心
- ⑥-2 算数授業での理解度
- ⑥-3 算数の習得
- ⑦-1 教師のICT活用
- ⑦-2 児童のICT活用

【2024年度までの実績を踏まえた計画の進捗と振り返り】

<1. 人材育成、教育の方針>

1. 礼拝、聖書科授業、研修などあらゆる機会や様々な場面で、スクールモットー“Mastery for Service”の精神について触れられ、全教員が“Mastery for Service”を意識して教育を行っている。「キリスト教主義に基づく全人教育」でめざす子ども像については、研修テーマに関わる研修会、キリスト教研修会等で意見を出し合い、めざす子ども像をイメージしながら教育内容を展開しようとしている。
2. 聖書科授業、礼拝において、教員たちは他者へのやさしさや思いやりを注ぐ人間の在り方について様々な視点から繰り返し子どもたちに語り掛けている。多くの子どもたちが、縦割りグループでの活動、ペア学年での活動で、下級生たちに対して思いやりの気持ちを持って接することができる。一方で、同学年同士では、相手のことを理解しない言動をしまう子どももいる。
3. 昨年度は英検3級を取得した6年生の割合が70%を超えた。今年度は5年ぶりに CCT(カナダ・コミュニケーションツアー)を実施することができ、日頃の英語学習の成果を発揮する機会を与えられた。思うようにコミュニケーションできなかった児童も多くいるが、その経験が帰国後の英語学習のモチベーションにもなっている。その他、関西学院大学への留学生との交流、台湾、韓国、ニュージーランド、インドネシアの小学校との交流を通して、英語コミュニケーションのみならず、国際理解教育の中でも大切な多様性理解への学びを深めることができた。
4. 授業の質を高めるためには、教師同士の連携や研修を通じて、常に子どもの見方や授業方法を改善していく姿勢が重要である。フィードバックを受けながら、実践を積み重ねることで、すべての子どもの学習権を保障する授業に近づけるための研修を行っている。具体的には、校内研究授業の実施、全国に開かれた学校公開会、また様々なテーマに基づいた研修会を教育学部をはじめ、全国から講師をお招きして研修を行っている。
5. KGSO(関西学院スポーツオムニバス)を再開し学院内での縦のつながりを強化するとともに、宿泊体験では、三田キャンパス、千刈キャンプ場との連携し、CAMP×US などの学生の協力のもと、帰属意識の強化も図っている。また、YMCA 阿南臨海キャンプの再開や、江田島での民泊を2日にするなど自然・人とのかかわりの強化に努めている。また、「夢プロジェクト」として、様々な仕事に携わっている保護者の方の協力のもとに、児童に向けて講演をしてもらっている。

<2. 生徒獲得の方針>

1. バイブル・オーセンティックへの意識は高い。グローバルに関しては国際交流行事が増えてきたことで意識が高まってきたが、そうした行事への参加意識にばらつきがある。ユニバーサルに関しては、授業の工夫はみられるが、支援を必要とする児童へのケアが十分にできていない現実がある。
2. 少子化が進む中、受験者数を維持しているという点で、様々な取り組みの効果はあがっている。おおむね協力的ではあるが、切実感という点ですべての教員が関心を高くもっているわけではない。
3. 内外共に A 入試・B 入試の併設は浸透している。B 入試の存在意義が薄れているが、それでもユニークな児童が入学しているのも事実である。A 入試で定員を割った際のセーフティネットとして置き続ける必要があるだろう。

<3. 中期的な課題>

1. A 入試の日程を平日に移したことで、他校との併願が可能になり受験者数は維持されている。少子化が進行する中で倍率を伸ばすのは至難の業ではあるが、2倍を越えなければほぼ選ぶことができない。時代の流れを捉え、他校との差別化をいかに図るかが急務である。
2. ネイティブ教員6名を含む10名を超える教員体制のもと、3年生以上は週4日の英語の時間を確保している。また、10月には英検を校内で実施し、英検3級取得児童が70%以上と高い水準で推移している。
3. 教科部会を中心に期末テスト問題の精選や記述テストの吟味など学期ごとに検討をしている。また、算数部会の教員を中心に授業見学を行い、事後検討会を実施し授業改善を行っている。また、評価の取り方を共有し教員間によって差が出ないような取り組みを強化している。
4. 子どもの健全な生活の確保をするため、授業時数の確保を前提に、土曜日授業日を削減した。具体的には土曜日は主に学校行事(体育祭・音楽祭・入試関連行事)に当てることにした。
5. 学力面で配慮が必要な児童に関しては、始業前に補習が行われ、一定の成果を上げている。生活面で配慮が必要な児童に関しては、カウンセリングも含めて学年や専科、必要な場合は全校で情報を共有している。特に支援が必要なクラスには児童支援の教員が入り、サポートを行っているが、配慮が必要な児童の数が多いため、必ずしも十分であるとは言えない。
6. 近年は毎年のように、病気療養される先生がいる。そのため、教員定員を満たしていない年度がある(2022年度は特に不足した)。補充したくても、契約教員の給与基準が低いいため募集を行っても、応募者がまばいまいない。特に教職経験がある方の給与基準が、公立校の講師給与と比べて圧倒的に低い現状である。
7. ITルームの効果的な利用方法(部屋として・機能として)を模索している途中である。ICT機器を効果的に用いた教育の充実と同時に、ICT機器に頼らない教育の充実とのバランスを考える必要がある。
8. 一貫教育を展開していく上で、最も大切なことと承知しつつも、様々な課題がある。教育連携部を中心として教育連携会議等を通じて、理念はもとより様々な価値観の共有を行っていく必要がある。新たに取り組み始めた、アセス・B-safeのように、担当や手続きを明確にして推進していく必要性を感じている。

<4. 一貫教育学校間連携について、昨年度の活動実績と次年度の予定>

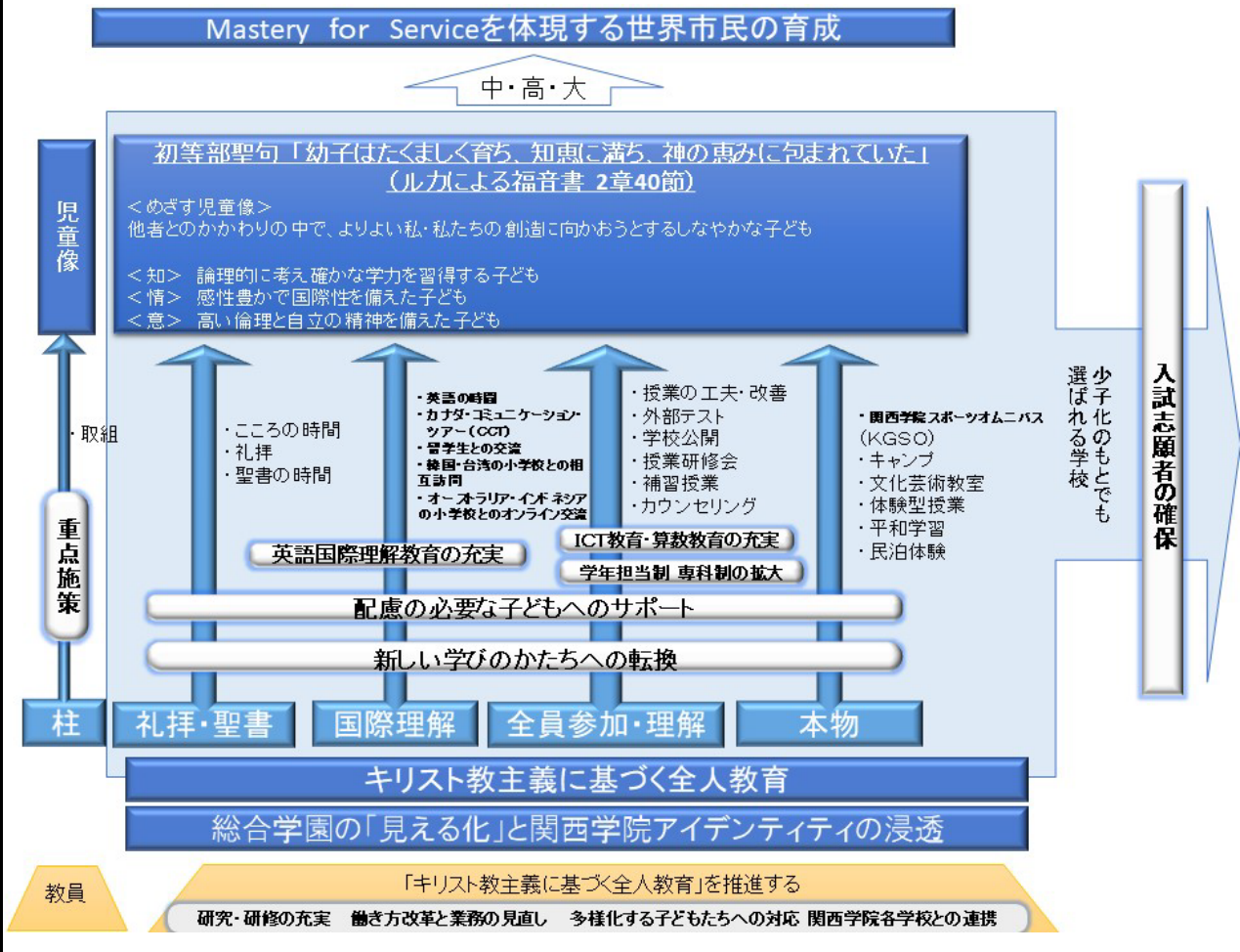
<実績>

- 中学部:5/9 2024年度中学部3年生学年団と2021年度初等部6年生担任団との情報交換会、6/16 6年生中学部訪問、6/25 推薦入試連絡会、7/9 5年生中学部説明会、8/29 初中高合同研修会
- 千里国際中等部:6/19推薦入試連絡会、7/9 5年生千里国際中等部説明会

<予定:>

- 中学部:9月 推薦入試連絡会、4年生中学部説明会、2月 進学生情報引継ぎ会、3月 スクールカウンセラー・養護教諭情報共有会、
- 千里国際中等部:3月 スクールカウンセラー・養護教諭情報共有会、進学生情報共有会

取り組みの全体像(イメージ)



以上